

もくじ 桂信春の彫金について 1P 千住グラウンドと自転車レース 2P
資料としての前掛け 4P 千住、御用市場となる 4P

足立史談

第596号

2017年10月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(29-308)

桂 信春の彫金について

—東京オリンピックとの関係を探る—

佐藤 貴浩



全長：97.0 × 127.1cm
(左) 砲丸投げ：47.5 × 45.5cm (右) 槍投げ：48.3 × 46.0cm

一〇月といえば、スポーツである。当館にもスポーツを題材とした資料が収蔵されている。それは、砲丸投げと槍投げを題材にした桂信春が制作した彫金である（写真）。もともとは区役所に掲げられていた。彫金は額装されており、右下にはプレートがあり、「昭和七年十月市郡併合により初代区議会議員に選ばれたる有志をもってこの額を寄贈するものである。昭和三十六年五月五日」と記されており、以下、寄贈者の名が連なっている。

寄贈者の名は、市川忠吉（千住柳町 ※町名は選出当時のもの（以下同じ）・石倉金次郎（千住東町）・飯塚充太郎（西新井町）・櫛原五郎（千住河原町）・千ヶ崎嘉助（花畑町）・遠田漂治（大谷田町）・鴨下栄吉（東島根町）・瀧澤長之助（千住中居町）・宇田川元造（千住龍田町）・小宮直太郎（元木町）・新井京太（千住旭町）・木島松五郎（栗原町）・清水金次郎（島根町）・清水宗忠（千住龍田町）・弘澤快龍（伊興町）・関原春重（千住三丁目）ら十六名で、櫛原五郎氏は初代副議長を務めた人物である。

この彫金を作成したのは、桂信春という人物で、彫金とともに経歴を記した文書が残されている。これによると、桂氏は明治三二年（一八九八）に東京市浅草猿若町に生まれ、明治四五年に千住尋常高等小学校を

卒業後、父光春氏に弟子入りして彫金修行を開始した。その後、政府が主催した官設美術展の文部省美術展覧会（文展）や帝国美術院展覧会（帝展）、戦後の日本美術展覧会（日展）などに十六回も入選している。さらに昭和一四年には国宝の法隆寺夢殿観音の厨子の金具を制作しており、その技術力は当時の最高峰にあったことが知られる。桂氏は千住尋常高等小学校を卒業しており、足立区にゆかりのある人物だったため、彫金の作成を依頼されたのだろう。

この彫金は具体的な寄贈の動機がよくわからない。昭和三六年は、初めて区議会議員が選ばれてから二九年目にあたり、節目となるような年ではない。また、当時、区内で大きなスポーツ大会が催されたこともないようである。それではいったいこの彫金は何のために寄贈されたのだろうか。それはおそらく当時の社会的な雰囲気や反映したものである。つまり、東京オリンピック開催に向けた活動の一環だったのではないか。

日本は、戦前の昭和一五年に東京オリンピックを開催することが決まっていたが、政治的な問題により、昭和一三年七月に開催を辞退した。その七年後、日本は終戦を迎え、国全体が戦災と貧困にあえぐことになり、東京は空襲によって焼け野原と

なっていた。しかし、日本は驚異的な復興を遂げていく。

昭和三十一年の『経済白書』には「もはや戦後ではない」と記され、昭和三五年には池田勇人首相の推進する所得倍増計画が閣議決定され、日本は高度経済成長の真っ只中にあつた。そうした中、昭和三四年五月二六日に西ドイツのミュンヘンで開催された I O C 総会で、東京オリンピックの開催が決定された。東京オリンピックは、復興した日本が、その姿を世界に伝えるための国家を挙げた一大プロジェクトであつた。

こうした歴史の中で改めて彫金について考えてみると、彫金にはオリンピックに関係したものであることを直接的に示す箇所はないが、日本代表の選手を彫っていること（選手の胸に日の丸が彫られている）やオリンピック開催決定後という時期からみて、東京オリンピック振興のため制作したものと考えられる。国家を挙げて東京オリンピックの開催を推進する中で、区議会議員の有志たちが東京オリンピックを盛り上げるために制作したのではないだろうか。

彫金が作られた二年後の昭和三九年）一〇月七日、足立区内を聖火ランナーが通過し、区役所前ではテレビ中継が行われた。そして一〇日に東京オリンピックが開幕し、日本は世界に復興をアピールするのである。

ただ、彫金にはオリンピックに関係したものであれば当然彫られるはずの五輪がない。このことから、東京オリンピックとの関係を想定するのは早計かもしれないが、ひとまずこれまで述べてきたように考えた。いずれにせよ、桂信春という当時の最高峰にあつた彫金師が千住尋常高等小学校の出身で、足立区にその作品が残されていたことは、広く知られてよいだろう。

（郷土博物館専門員）

千住グラウンドと

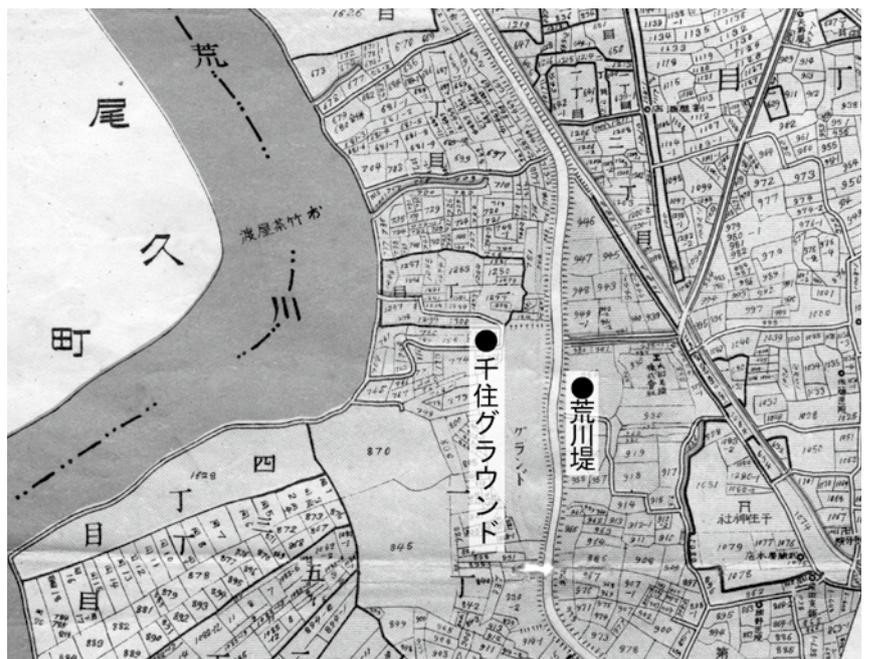
自転車レース

奥村 麻由美

記録に残る世界最古の自転車が製作された国が日本であることをご存知であろうか。現・埼玉県本庄市のあたりの名主であつた庄田門弥という人物が享保年間頃（一七一六～一七三五年）発明した「陸船車」というもので、当時流行していたからくりを応用した発明品であつた。見た目は名の通り小型舟に四つの木製車輪がついたような形状で、足元の板を踏んで進むというものである。およそ今日イメージする自転車とは程遠いが、少なくとも「足漕ぎ式で自走する乗り物」であつた点におい

ては、世界最古の自転車であつた。当時、乗り物といえば船以外のイメージがなかつたのだらうという点も推測出来て面白い。時の将軍徳川吉宗も上覧したと記録があり、またこれに興味を持った彦根藩士平石久平次が詳しい図面を残し、平石自身も「新製陸船車」という門弥版にハンドルのようなものがついた改良版を製作した。現代の自転車の本場欧州で自転車の原型が開発され始める十八世紀より、百年近く以前に国内でこのような技術が生まれていた点は注目したい。残念ながらこの時代は物流の新技术開発に厳しい制限があつたこともあり、その後の改良や実用化には遠く、変わった発明品の域を出なかつたが、自転車史の中では小さくも興味深い一件となつているのである。

さて、現在と近い形の自転車が国



大正 14 年千住地図より
千住グラウンドの位置 (現在の千住緑町3丁目1~8, 29~30付近)

内に広まったのは、海外から輸入され始めた明治初期からである。大変高額で、現在価格で換算するとおよそ一台四百万円程度の、現代でいう高級自動車に該当するような憧れの品であつた。まして今の一般自転車のような荷載機能はなく、自転車税もかかるとなれば、貴族や富裕層のごく一部が所有出来るだけであつた。この頃、徳川家最後の将軍慶喜が自転車を気に入り、よく遠乗りしていたという事が知られている。

やがて自転車は新しい時代の交通手段として象徴的存在になり、ようやく一般庶民にも普及し始めた。明治二十一年（一八八八）には国産自転車の生産がされていたという最古の記録が残っている（国産初のものかどうかは不明）。この頃から、国内でも盛んに自転車レースが行われるようになっていた。

この当時、自転車クラブはブームの盛り上がりに合わせていくつも誕生したが、そのうちの一つに現在の日本国内の自転車競技を統括する公益法人「日本自転車競技連盟」の前身

同會は先に十五周年園遊會を荒川遊園地に於て開催されたが、同會が去る明治四十一年三月六日神田區仲町福田屋に孤々の産聲を擧げて以來、茲に十有五年に及んだが其第一期より本年に至る幹事及び大會擧行の會場及時日は左の如し

◎明治四十一年

第一回競走會……四十一年四月十三日
第二回競走會……四十一年十一月三日
競技開催の場所……千住グラウンド

幹事……鈴木重行、勝山信吉、徳永爲次
酒井銀太郎、宮田福三郎、鈴木一郎、湯本信太郎、松下常吉八氏

◎明治四十二年

第三回遠乗會……三月三日玉川に遠乗
四月三日に川崎遠乗
第四回競走會……四十二年十月十七日
競技開催の場所……千住グラウンド

幹事……勝山信吉、宮田福三郎、湯本信太郎、酒井銀太郎、七藤安次郎、鈴木一郎、鈴木重行、杉浦敏太郎、郎の八氏

◎明治四十三年

東京輪士會十五年同願録

「輪業世界第62号 輪業世界社 大正12年」 自転車文化センター所蔵

身である「東京輪士會」がある。この會が明治四十一年四月十三日、第一回公式競技會として主催した際のレース会場が、千住グラウンド（別名・牧の野グラウンド）であった。千住グラウンドは緑町の荒川堤（現在の墨堤通り）沿いにあった運動場である。

当時の記録によると、荒川堤周辺は川堤らしく何も無い土手であったが、自転車競技のトラックコースがあり、桜の時期に行われるレースは花見と相俟って大変な盛況ぶりであったという。千住緑町は一時「自転車競走場くらいしかない原っぱ」ともいわれ、千住遊郭移転計画の候補地にもなっていたが（その後遊郭街は、柳町への移転となる）、逆を言えば、それだけ自転車のグラウンドとしての認知度はあったのだろう。『足立史談』第二五八号の「大正バイコロジ」（安藤義雄）によれば、千住グラウンドには自転車競走専用の本格的なコースが作られていたらしい。明治四十一年（一九〇八）のこのレースの新聞記事には、

「桜爛漫の荒川堤」

東京輪士會主催の全国自転車大競争は昨日午前十一時より北千住の常設グラウンドで挙行されたが、恰も近來の好日和なれば上野向島の

色褪せた花を見んより荒川の遅梅がよいと見物は一樣に一銭蒸気で押し懸ける。千住寄りの桜は雪にも雨にも犯されず今が真盛り艶々とした花弁が一片一片東風にあほられて袖に懸る様の得も云はれぬ見事さ。此の花のトンネルの中程に競走場があるので、花見がてらも見物は十重二十重の折重なつて非常の盛会、（以下略）

「都」四月十七日
（明治新聞記事目録「足立史談會」）

とあり、荒川堤の満開の桜並木の風景に、当時あった一銭蒸気船の往来、なんとも華やかな会場の様子と自転車レースへの熱気が伝わってくるようである。この千住グラウンドは昭和六年の地図では確認出来るが、昭和十一年の地図ではすでに住宅地となっており、この間の千住緑町の分譲地化に伴い消えてしまったと思われる。

また右下の写真については、大正十年（一九二一）頃、千住グラウンドで同じく桜の季節に行われた自転車レースの様子を写した貴重な写真である。モノクロだが、選手達が跨るのは競技用自転車で、よく見ると背景に堤上の桜や人垣の様子も確認出来る。残念ながらこの自転車競争がどの団体の大会かは判明しなかった。先述の東京輪士會は大正十年頃



には羽田グラウンドをレース会場としており、千住グラウンドは使用しておらず、別団体であると考えられる。しかしながら、このような国内代表選手の集まるレースが、かつてはここ足立区でも頻繁に開催されていたということは実に興味深い。

参考・埼玉県立歴史と民俗の博物館「The Amusement」第二七号「埼玉県と自転車」奥村麻由美

（なお、自転車文化センターに国内自転車レースの歴史についてご教示いただきました。御礼申し上げます。）

（郷土博物館専門員）

資料としての前掛け

萩原 ちとせ

「配りものの手拭い」（『足立史談』五五四号）で、商店などが配った名入りの手拭のことを述べたが、同じように配り物としてつくられたものに前掛けがある。これは現在、帆前掛けともよばれ、厚手に織られた綿布を紺で染めて、文字や屋号などを白抜きしたものである。腰のあたりをヒモで縛る。

かつては都市部の労働者の作業着として、欠かせないもので、衣服の汚れを防ぐ役割をするとともに、丈夫で幅広なヒモを腰に回して強く縛ることに由来の腰の保護や、防寒など、丈夫な帆布の特徴を生かして重宝されていた。また、染め抜いた文字や屋号が宣伝の役割もした。

商店名や製品名が染め抜かれた前掛けは、その店舗の従業員が使用するだけではなく、手拭と同様に取引



先やお得意さまへ配り物として渡された。こうした慣習は自動織機が使われ、織りが容易になった大正期から、広がり出したと考えられる。

前掛けの産地として大きくなったのは愛知県豊橋市で、その生産は一九五〇から七〇年代に爆発的に広まり、多い日は一日一万枚が出荷されたともいい、あらゆる業種で、社名や屋号が入った前掛けを作ったという。（「前掛けの歴史」エニシング <http://www.anything.ne.jp/about.html> 一〇月三日）

区内の事業者が作った前掛けもいくつか確認され、常設展示している千住市場の前掛けもそのひとつである。また、昭和三〇年代から盛んになった区内の菓子製造業（会社）の前掛けも確認されている。会社を名乗る業種でも、当時は前掛けを便利に使用していたのである。

写真の前掛けは、古紙等の回収業の前掛けである。現在は存在しないが、本木町はかつて、すき返し紙の生産が盛んな地域であり、区内の産業の歴史を表す貴重な資料である。区内の事業者が製作した前掛けはほかにもあることが想像される。前掛けをお持ちの方は、郷土博物館に是非ご寄贈下さい。

また、この越川商店についても情報をお寄せ下さい。

（郷土博物館学芸員）

千住掃部宿の「旧書留」から⑨

千住、御用市場となる

多田 文夫

千住宿は幕府・江戸城の御用市場として知られている。一昨年の三月に本紙上で紹介した資料である（『足立史談』五六五号）。詳細は同号にゆずるが、享保二十（一七三五）年に幕府代官（関東郡代）の伊奈忠達（いな・ただみち）に対して「千住掃部宿市場」の名で米穀・前栽（野菜）・川魚の三分野の間屋が幕府・徳川家の御用をとめることについて「請証文」（引き請けたことを示す文書）として提出したという内容である。以後、明治に至るまで用をとめていた。

【御用市場請証文】

（16丁裏）17丁裏 白紙
（18丁表）

差上申一札之事

足立郡千住掃部宿市場之儀、旧来不相知候得共、往古より御用等も相勤、右市場之助力を以、是迄相続仕候二付、願之通、川魚前さい米穀定市場被 仰付難有仕合奉存候、向後、御用之節ハ無滞相勤可申旨、被仰付奉畏候、右御請証文、差上申処如件、

足立郡

千住掃部宿

川魚間屋

享保廿卯年三月 惣代 伝 吉

前さい間屋

惣代 市右衛門

（18丁裏）

米穀間屋

惣代 平右衛門

惣代 庄左衛門

御代官様

伊奈半左衛門様也

この御用市場は「定市場」とあるように公定の市場となった。江戸城御用は冒頭にあるとおり「往古より御用等も相勤」ていたとあり、このときから御用がスタートしたわけではないだろう。

川魚と前栽、そして米穀というのは千住の周辺農村の特産物である。他の伝承等によると江戸時代はじめ頃から市場が発展していったが、十八世紀には御用市場をひきうける実力を併せ持つことが見えてくる。

問屋たちの経済力は、さらに発展し、さらに半世紀が過ぎた十九世紀初頭には文人たちの交流の場となる文化的な繁栄の基礎となっていく。その歴史的経過のメルクマールとなる重要な史料である。

（郷土博物館学芸員）